世界の女の子の識字率を上げるための提案
～女の子の識字率が上がれば世界が変わる！～

宮城県仙台第三高等学校　　50 班

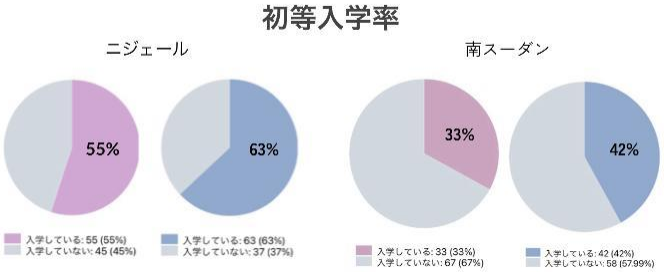
要旨
私達は世界各国の教育に興味があり、「識字率」に着眼点をおき探究を行った。識字率とは文字が読み書きすることができる人の割合のことである。まだ識字率が低い国の共通点として男の子より女の子の識字率のほうが低いことが分かり、私達はこの問題に少しでも貢献しようと大きな一つの活動として、絵本制作を行った。最終的なゴールである実際に子どもたちに絵本を届けることはできなかったが、探究活動を通した経験と知識を活かして絵本制作のプランを作成し見本まで作成した。

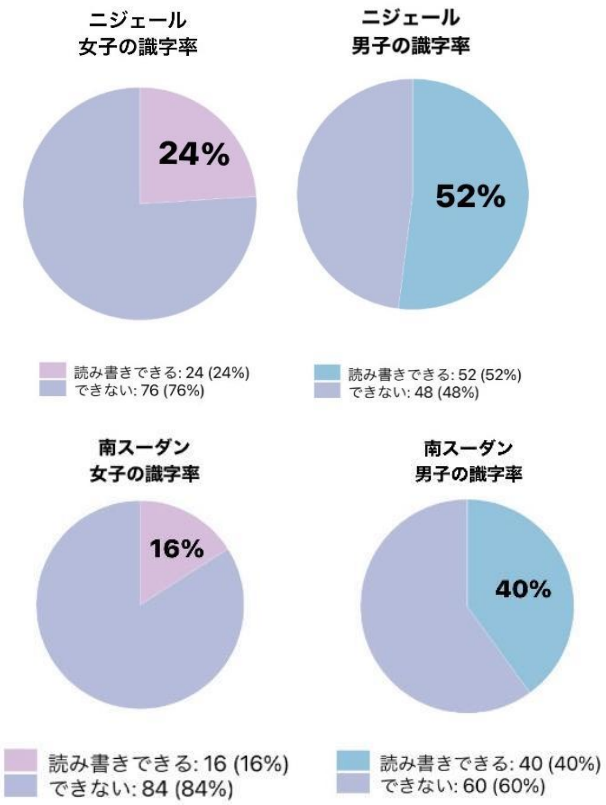
キーワード：識字率、学習環境、衛生環境

Ⅰ．はじめに

世界全体の識字率は女子 88%、男子 92%で一見高いように見える。しかし、世界には未だ識字率が５割に満たない国々がアフリカや発展途上国を中心に存在する。例えば南スーダンの識字率は女子 16%、男子 40%と言われていて特に女子は５人に１人しか読み書きができない。（「子供白書２０２１」より）識字率が低い中でも更に男女差がある。また、その国の就学率も同様の関係性があることがわかった。なぜ女子の識字率が低いのか。その要因は貧困だけではない。主な要因は道路が整備されていないため危険な通学路、民族や宗教による習慣や差別・偏見、不安定な衛生環境の３つである。特に女子特有の要因となる衛生環境の悪さ。先程のような国では、学校はあっても、トイレや手洗い場など衛生環境が整っていない。生理と向き合う女子たちにとってそんな学校には行きづらいのだ。この問題は女子特有だからなのか世界からは見て見ぬふりの放置状態であった。このままでは「教育を受けられない→文字の読み書きを学べない→仕事に付就けない」という負の連鎖が母から子へと引き継がれてしまう。そこで私たちはこの問題に面と向き合って解決に少しでも貢献したいと思った。例えば読み書きできる女子が増えると薬の説明書が読めたり自分たちの体を守るための知識を持つ母親が増え、母子ともに死亡率が下がったり、就職率向上や発展途上国の経済成長への寄与など他の国際問題の解決にも繋がる。実際、女子の教育機会が奪われ、識字率が低いことによる世界の経済損失は約 15 兆ドルに及ぶと言われている。解決策を何度も話し合った末、ふと思ったことがあった。そもそも危険な道を通ってまで学校に行く必要があるのか。学校で勉強することだけが教育とは限らなのではないか。私たちは識字率や就学率が低い国の衛生環境から変えるのではなく女子の知識の面から改善することが最善だと考えた。

世界の女の子の識字率を上げるために、学校に通えない子でも自宅で学習できる教材として私たちは絵本を提案する。





Ⅱ．研究方法

絵本を作るというゴールに向けて私たちは識字率が低い国の主に教育に関する状況把握、そして絵本の作り方について学ぶことの二方向からアプローチしていくことに決めた。

ｉ）識字率が低い国の状況把握について

①カンボジアオンラインスタディーツアー

絵本制作を進めていく中で、実際識字率の低い国がどのような環境や設備で暮らしているのか。やはりインターネットや文献上から充分な情報を得るには限界があった。そこで私たちは２０２２年８月５日と６日に日本ユネスコ協会連盟主催のカンボジアオンラインスタディツアーに参加した。カンボジアの識字率は近年上昇傾向にあるものの、未だ教育の質の低さや農村部と都市部の経済格差などが問題となっている。その歴史的背景を調査すると、1975 年から約四年間続いたポル・ポト独裁政権により、人口の約四分の一が虐殺され、教育の崩壊が起きたという。教師の人数不足を補うために教育を受けてこなかった人が教師になったりと学校教育の質は段々下がっていった。

子どもたちが実際にどんな環境で勉強をしているのか、彼らが教育に何を求めているのか、生の声を聞くことを目的とし、オンライン上で日本各地の参加校の生徒の皆さんやカンボジアの方々と交流をした。そこでは寺子屋に通う子どもたちや先生の話を聞くことができ、現状を知ることができた。

②インターネットや文献による調査

ユニセフの「子供白書」やユネスコなどの公的機関以外にも実際に海外諸国を訪れている人の体験談なども重要視し、情報収集をした。やはり実際に現地へ行った人の話や現地に住んでいる人の話が一番信憑性があり、有効である。だが、ネット上の情報は班の中でも真偽を見極める必要があった。

ⅱ）絵本制作について

・たげんごオリジナル絵本の会への取材

２０２２年１２月にオリジナル絵本の会の代表者であり、京都女子大学国際交流センター助教の滑川恵理子先生、絵を担当している田中ひろこさんにお話を伺った。目的は日本語以外の絵本を作る際の過程や気をつけるべきことなど実体験を聞くことである。たげんごオリジナル絵本の会では日本在住で外国に繋がりのあるお父さんやお母さんが日本語に限らず、母語でも子供に話すことを応援していて、子供達に親につながる言語に親しんでもらうために親子を対象として絵本を制作しているそうだ。主に日本語ともう一つの言語（アラビア語や中国語）で構成されている。

Ⅲ.探究内容

ｉ）識字率や教育の質が低い国について

・スタディツアーより

私達がオンラインで訪問した農村部にあるリエンダイ寺小屋は机や椅子、教材、制服などが用意されている。しかし、そこには明かりや空調設備がなかった。寺子屋の子供たちが使用している教材を見せてもらうと、イラストが豊富で日常における衛生知識などが書いてあった。言語学習や計算だけでなく、そういった普段の生活に役立つことも寺子屋で学ぶそうだ。

次に寺子屋に通う子供の家を訪問した。農村部に住む彼の家や周辺の家は天井や床に穴が空いているという。机や明かりがないため主に自宅では学習することは難しく、読書をするそうだ。

↓私たちが参加したツアーのダイジェスト映像

【10分ダイジェスト】高校生カンボジアスタディツアー2022（オンライン）

（リエンダイ寺子屋）

何よりツアーを通して感じたのは子供たちの勉強したいという意志の強さである。寺子屋の子供たちに寺子屋に通う理由を聞くと、皆寺子屋に通うことや勉強の楽しさ、将来の夢などを語ってくれた。カンボジアに現時点で10以上の寺子屋は建てられたものの、まだ全員が通えている訳では無い。勉強したくても、自分の夢を叶えたくても学校にも寺子屋にも通えない子供たちがいるということだ。子供たちの意志を無駄にしないためにもよりいっそう探究への熱意が深まった。

ⅱ）絵本制作について

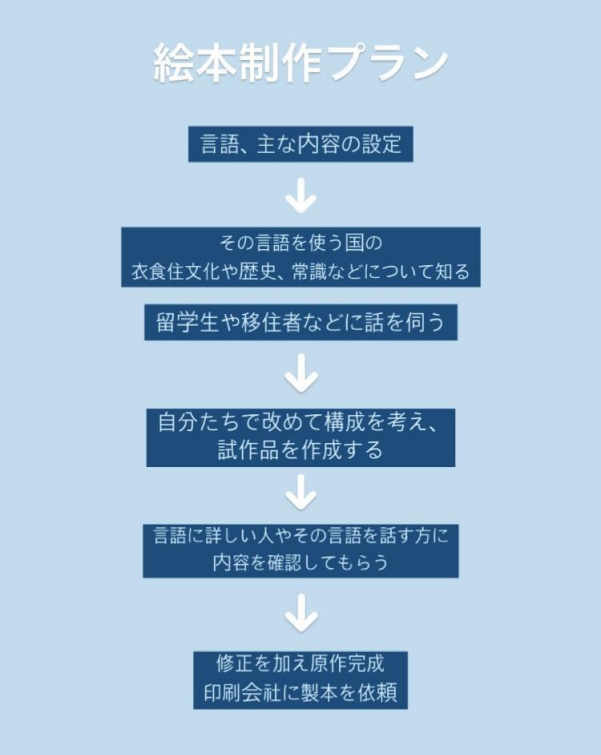
・滑川先生と田中さんの経験談より

たげんごオリジナル絵本の会ではある家族のエピソードをもとに絵本の構成について家族と綿密に話し合い決めていく。一冊を仕上げるのに約半年かかるそうだ。内容を考えていくにあたって、まずその国の衣食住をじっくり観察し、文化にたくさん触れる。その国の映画を見ることも案外役に立つそうだ。もちろん国が違えば言語観も価値観も常識も全く違う。何かを絵で表すにも私たちと対象国の人たちでイメージしたものが違ったり、外国語にも日本語の平仮名、カタカナ、フォントの違いがあったりと、身長に表現を吟味していかなければならないそうだ。服装やジェスチャーなども同様である。お二人が口を揃えて一番大切にしているとおっしゃっていたのは人と向き合う時間であった。言語もある程度自分で学ぶものの、細やかな違いは本人から直接学ぶそうだ。

お話を聞いて自分が思っていたよりも文化や言語の違いに慎重にならないといけないことに驚いた。自分たちは衛生知識についての内容を作ろうと考えていたが、例えば手洗いは日本では当たり前のことだけれども、対象の国では水がもしかしたら貴重なものかもしれないし、その国の水が衛生的に大丈夫なものであるのかなど、様々な視点から問いただす必要があると思った。

・プランの作成

滑川先生の経験談を聞いた私達は絵本の制作プランを考えた。作成時はまだ新型コロナウイルスが流行していたため、国内で行うという前提で考えた。そのため、本来であれば対象の国を実際に訪れ、直接学ぶことが望ましいが、国内の留学生や日本在住の方などの協力を得ることにした。



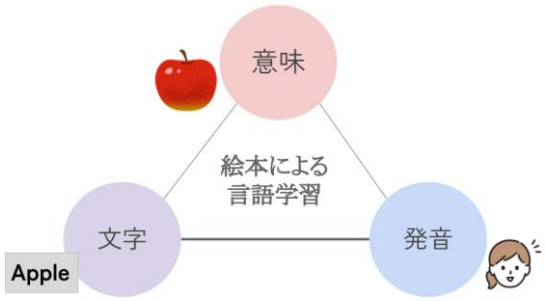
・試作品の作成

プランをもとに私たちは絵本の試作品制作に取り掛かった。他の人に見せる際にもわかりやすいように英語で作成した。あくまでも一例だがこのように日常に注目した短いものや、ストーリー性のあるお話まで用意した。また、明か

りの少ないところでも見られるようにシンプルなデザインにした。

iii）各種発表について
この問題を広めることは私達がこのテーマと直面してからの果たすべき任務でもあった。そのため私達は機会があれば外部発表会に参加し、この問題について話すとともに普段とは関わりのない人たちとこのことについて意見交換を行ったりした。また、学校で行われたイノベーションフェスタやマラヤ大学との交流では英語で発表を行い、様々な国の方々に私達の探究について話し、アドバイスや感想を頂いた。特に異性や年代の違う人からの意見は貴重だった。
しかし、多くの人の注目を集めることに難しさを感じた。特に学校での自由な発表の場では聞いてくれる生徒に男女差が明確にあった。やはり触れづらい内容だからなのか、男性で聞いてくれる人が少なかった。

Ⅳ.考察
・絵本の有効性について
　さて、私たちは序盤で絵本を提案したが、実際に女の子の言語習得や衛生知識の獲得に寄与するのか、改めて考えた。様々な言語習得に関する文献を調査すると、言語を学習するに当たって「意味」「文字」「発音」の三点が基盤となっていることに気づいた。文字を読み書きすることができないというものの、非識字者は母語を日常生活の中で話すことはできる。しかし、文字と意味、文字と発音の繋がりが彼らの頭の中で結びついていない。そこで、文字と絵を兼ね備えた絵本を使用することで三つが結びつき、言語を習得するきっかけになると考えた。英語で例えると、ある非識字者はりんごを見たときにそれが apple と発音するものと知っているが、実際に apple というスペルだけを見たときにその人はどう発音するかが分からない。しかし、絵本でりんごの絵と apple という文字を同時に見ることで apple という文字をどう発音するのかが分かるようになる。



また、机や筆記用具など学習に必要な物が揃わないため学習ができないということを考慮し、それらがなくても絵本一つで家庭で学習ができ

るように、絵本に大きく文字を書くことで指でなぞり書きができると考えた。
また、絵本は子供 1 人だけでなく親子でも使うことができて、字を読み書きできる人とともに学んだり、親と学ぶことで周囲の人との繋がりを子供に授けることができると考えた。

・女子の識字率問題への関心度について
　先程も述べたように、発表活動をしていく中でこの問題に対する関心度の男女差を感じていた。日本では生理などの話はあまりオープンではないし、普段の生活でも生理と関わりがほとんどない男性にとって少し内容を理解しづらい部分があったと考える。男女偏りなく沢山の人にこのことについて関心を持ってもらうことが私たちの探究班の課題でもあった。性別や年代別に関心の度合いをアンケートなどで調査し、なぜそうなるのかを吟味の上、関心が低い層にどうアプローチするかも企てる必要があった。確かに私たちの探究テーマは女子に焦点を当てているが、問題解決がもたらす影響、恩恵はもちろん男性にも与えられる。このことをしっかり伝えていくべきであった。

・絵本のデメリットについて
　絵本をこちらで施策をしてみることは可能だが、実際に絵本として印刷会社で製本し、現地に届けるとなるとかなりの費用と時間がかかる。そしてどのようにして現地に届けるのか。できることが限られている学生だけで成し遂げることは困難である。日本国内でもいくつか発展途上国などに日本語の絵本を届ける国の言語に変えたものを届けている団体はあるが、一から日本語以外の言語で絵本を制作し届けている人、団体はなかなか見当たらない。
　しかし、カンボジアのスタディツアーを通して自分たちと同じ意志を持つ学生が他にもいることを実感した。国際的な課題であるためたったの数人で問題解決に貢献することは難しいかもしれないけれど、同じ意志を持つ学生たちが集まって協力すればできることが増えるのではないだろうか。こういったことをもっと活発にするために、学生でも国際問題に簡単に関われるような環境を整え、普及させていくと良いと考えた。

V.まとめ
　今回の探究活動を通して、世界や各国を取り巻く様々な課題について触れ、視野を広げることができた。大きな団体や組織だけでなく、個人でも教育に関する課題の解決に国境を超えて少しでも貢献しようとする方々が沢山いて、様々な活動が行われていることを初めて知った。また、この活動をするにあたって異文化について学ぶことの難しさを感じた。
今回私たちが取り上げた問題は今この世界に無数に存在する問題のほんの一部であり、これからは識字率の問題だけでなく他の問題にももっと関心を持っていかなければならないと思う。どの問題も単独で起こっているのではなく、他の問題と絡み合って引き起こされていることを感じた。
　違う国の問題について関心をもち、校内の人や日本人に限らず色々な国の人と解決へ取り組むことは決して簡単なことではなかったが、班員とチャレンジすることを大事にしそれぞれの長所は活かし、足りないところはみんなで補い合いながら活動したことで、初めての挑戦を試みる勇気や課題解決力を以前よりも身につけることができたと思う。探究活動を勧めていく中でどんな場面でも一番大切に感じた人との繋がりをこれからも大切にしていきたい。

　参考文献

たげんごオリジナルえほんの会について
子どもたちのメンタルヘルス
https://www.unicef.or.jp/kodomo/sdgs/
4.質の高い教育をみんなに | SDGs クラブ
世界の教育の制度を比較し日本の教育について考えよう
【世界の女子教育】女の子が学校に通えない 3 つの原因
【3/2 講演会】カンボジアの教育を「読書ワークショップ」で変えられるか？ 日本人ファシリテーターの挑戦
https://cice.hiroshima-u.ac.jp/wp-content/uploads/publications/Journal3-2/3-2-9.pdf